

安全・安心な社会が 支える、元気な町と文化



大阪府出身。1978年東京大学大学院工学系研究科土木工学専門課程修了。近畿地方建設局和歌山工事事務所長、大臣官房建設技術調整官、総合政策局国際建設課長、土地・水資源局水資源計画課長、中部地方整備局企画部長、関東運輸局次長、内閣府沖縄総合事務局次長などを歴任。2008年7月から2009年7月まで近畿地方整備局長。

国土交通省 近畿地方整備局長(前)

木下 誠也 氏

浪曲師

春野 恵子 氏

東京都出身。東京大学教育学部卒業後、出版社勤務を経て芸能界へ。日本テレビ系「進め!電波少年」でケイコ先生として脚光を浴びる。2003年二代目春野百合子師匠に入門。2006年初舞台。2007年ユニット「新星浪曲☆新宣組」、「浪曲乙女組」を結成。現在、東西の舞台で活躍中。近況などは「浪曲師・春野恵子ブログ」(<http://blog.goo.ne.jp/keiko-haruno>)へ。

「あって当たり前」と思われがちな社会の安全・安心は、暮らしにとって重要で不可欠なもの。豊かな暮らしを創造し、近畿全体を活力のある地域とするためには、時代の変化に対応して社会の安全・安心を維持する努力を怠ってはなりません。今回は、近畿地方整備局長(対談時)・木下誠也氏と、浪曲師・春野恵子氏をお招きし、近畿の魅力を高める文化や町づくり、社会の安全・安心について語り合ってくださいました。異なる世界のお二人ですが、近畿の発展を願う気持ちは同じ。そこからさまざまな興味深い話題が飛び交いました。

大阪と東京の関係は、欧州vs.米国に似ている

木下 ● 私たちは対照的なんですよ。私は大阪で生まれて小学5年で東京に引っ越しました。一方、春野さんは生まれも育ちも東京で、今は大阪にお住まいですね。
春野 ● 大阪で浪曲師になったので、ずっと大阪に住んで、大阪から発信していきたいと思っています。
木下 ● 関西の人材は随分東京に流出していますが、戻ってくる人は少ない。だから春野さんのように東京から移り住む人や、戻ってくる関西出身者が増えるのが理想的です。東京に一極集中するのは日本全体としてもよくありません。

春野 ● 芸能でも全部東京から発信というのはおもしろくありませんね。
木下 ● 関西のトップ企業の多くは本社を東京に移しており、関西の空洞化が進行しています。しかし、携帯電話の蝶番で世界100%のシェアをもつ会社があるなど、優秀な企業がいくつも関西にあるんです。そういう強みをもっと活かせばいい。文化・歴史・伝統も関西の強みで、浪曲もひとつですね。大阪で浪曲師になられたのはどんな経緯ですか?
春野 ● 東京の寄席で浪曲に出合ったとき「一生究めていきたい!」と思ったんです。春野百合子師匠の浪曲を聴いて「弟子になろう」と決意して、出演先の国立文楽劇場^{※1}の楽屋に押しかけて弟子

入りをお願いしました。何度も断られました。最終的に許されて大阪に移り住みました。
木下 ● 最初はどちらに?
春野 ● 岸和田です。当初、持ち物は洋服と身の回りのものぐらい。浪曲で知り合った人たちが援助をしてくれました。「炊飯器が無い」ともらえば2個も3個も集まってきて、「そんなにいませんよお」なんてことも(笑)。東京の人はプライベートに関わるのは遠慮しがちですが、関西人はとってとてもストレート。大阪だったから修業を続けられたんだと思います。
木下 ● 関西は人間味が違いますね。大阪と東京の関係は、欧州対アメリカという感じがします。欧州は歴史・文化があり、

大事にしている。日本に来て歴史・文化に興味を持ちます。しかしアメリカ人はヨーロッパ人ほどには興味をもたない人が多い気がします。ひとつの物差しで東京と比べるのではなく、関西らしい特色を活かせばいい。私のように流出した人間が再び戻って暮らしたくなるような魅力のある地域にしたいですね。



※1 国立文楽劇場(大阪市)
世界無形遺産である文楽を中心に、舞踊、邦楽、大衆芸能などの公演を行う。上方芸能の保存・継承の拠点にもなっている。

平成21年の5月・6月に行われた浪曲乙女組の公演チラシ。



※2 浪曲乙女組

2007年に結成した浪曲ユニット。メンバーは関東で活躍中の玉川奈々福、関西の若手、菊地まどかと春野恵子。今年の東京・大阪公演では浪曲のイメージを激変させる華やかな舞台で話題を呼んだ。

舞台上熱演中の春野さん(写真上下とも)



浪曲はオモシロイ！
乙女だって、うなります！

木下 ●先日、舞台「浪曲乙女組」^{※2}を観に行きましたが、本当におもしろかった。美女3人の共演が実に華やか。浪曲=男性というイメージが変わりました。

春野 ●浪曲はおじさんが青筋立ってうなるもの、と思われているでしょう？だから、「乙女だって、うなるのよ！」とアピールして、浪曲を聞いたことのない人にも広めていきたいんです。

木下 ●乙女組で浪曲の魅力に触れたような気がして、師匠の芸も観てみたいと思いました。

春野 ●狙いはそこなんです！ 私たちをきっかけに浪曲に出合っただけで、その後には素晴らしい師匠方の芸を観てほしいと思っています。

木下 ●浪曲は小さな会場で行うんですね。先日のお客さんは100人ぐらい？ 舞台に近いので一体感があっていいんです

が、あまりもうからないですね。

春野 ●大きな会場もあるんですが、浪曲をやるのにちょうどいい場所がないんです。大阪は小屋が少なく、選択肢が狭い。そのうえ、劇場がなくなっていく一方で、公演場所に困っています。日本は芸能への支援が少ないのかなと残念。ヨーロッパなどは自分たちの文化を支える意識が強いのでからね。

木下 ●このごろ変わり始めていませんか？ 日本特有の文化に戻ってきているような気がします。

春野 ●確かに、ちょっと揺り戻しみたいなのは感じます。浪曲も呼んでいただける場所が増えてきました。小屋以外でも、地域の商店街に呼ばれることも多いです。若い人が集まるカフェでやったりもします。浪曲を地域に根ざして発展させていきたいと思っています。また浪曲を通じて、地域の人々のコミュニケーションの場が盛り上がり、町が活性化していけばうれしいなあと思います。

防災は行政まかせにせず、
地域の輪で災害に強い町に

春野 ●この会場は大阪城が正面に見えて、とてもいいロケーションですね。

木下 ●昔、この大阪城周辺は台地で、他はずっと下がっている地形でした。元々そういう土地なのでしょっちゅう淀川が氾濫して被災していました。それで琵琶湖に瀬田川洗堰、淀川に放水路をつくるなどして整備したんです。今の淀川は放水路で、中之島界隈が旧淀川なんですよ。

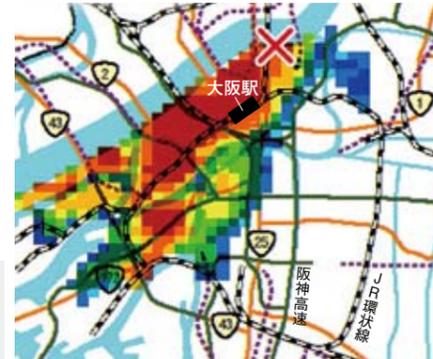
春野 ●ちょうど「大阪城落城の淀君」という演目を勉強しているのでよく聞いておこう。

木下 ●大和川は元々こちらに流れていましたが、江戸時代に堺に流れ込むように付け替えて淀川の水位を抑えました。明治の大洪水では大阪のほぼ全域が被災し、これを発端に河川法ができたんです。

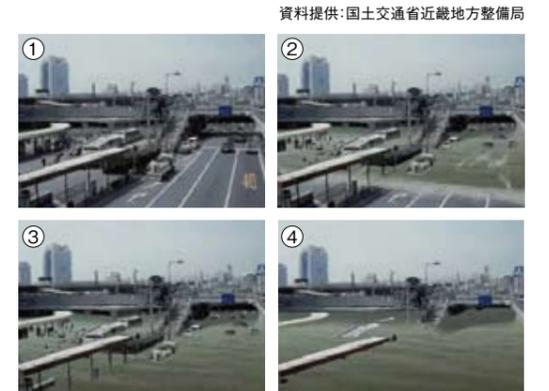
春野 ●大阪は治水の歴史のあるところなんですね。

※3 淀川河川氾濫の脅威

図は、200年に一度の降雨で左岸9.2km(長柄橋付近)で堤防が決壊した場合の最大浸水区域図。人口・資産の集まる淀川沿岸域には重要な交通ネットワークが集積しており、淀川の氾濫は地域社会経済にも甚大な影響を与える。



最大浸水区域図



氾濫イメージ
大阪駅付近の氾濫状況を表しています。およそ1時間程度で氾濫水が到達し、最大で2.9m程度まで浸水します。

資料提供:国土交通省近畿地方整備局

木下 ●もっとも、治水や道づくりは住民が自分の命を守るため、あるいは自分の利便性のためのもので、昔は道普請など住民の力で行っていました。自分たちのできない規模の大きなことを行政に頼るのが本来の姿です。水防活動は元々、地域住民主体で行うことで、まず自分たちでどういう対策をするのか？ということが前提なんです。いまは公共事業として主に行政が行なっていますが、それはあくまで住民の皆さんの切実な要望を受けてのこと。ところが一部マスコミ報道では、国土交通省が勝手に道路やダムをつくっていると誤解しており、本末

転倒です。
春野 ●淀川の氾濫はもう大丈夫でしょうか？ 地球温暖化で雨の降り方が異常になってきていますが。
木下 ●ゲリラ豪雨なんて昔はありませんでした。淀川とか大きな河川の被害は、過去を上回る規模になります。仮に淀川の堤防がカ所決壊するだけで、被害額は20兆円近くになると予測されています^{※3}。今年、「水災害予報センター」を設置し、狭い範囲の豪雨をキャッチできる「Xバンドレーダ」の整備も進行中で、情報伝達の迅速化も図っています。甚大な被害が出ないようにするために、水害に

しろ地震にしろ、防災対策ではやるべきことが山ほどあります。
春野 ●浪曲にも災害を扱った演目がありますよ。先輩の菊地まどか姉さんの「あゝ吉岡先生教壇に逝く」^{※4}。75年前の室戸台風のとき、倒れた校舎の下敷きになりながら5人の児童を抱きかかえて救い、自らは亡くなった若い女性教師のお話です。
木下 ●そんな感動的な浪曲があるのですか。災害の恐ろしさを忘れずに、防災対策の重要性をしっかり認識してもらうためにも、そのような浪曲もやっていただくようにお願いします。

※4 「あゝ吉岡先生教壇に逝く」

「中に子どもがいるんです」止めるその手を振り切って、吉岡先生が校舎に戻るその途端、崩れ落ちる校舎……。浪曲師・菊地まどかさんの「あゝ吉岡先生教壇に逝く」の一節。1934年(昭和9年)の室戸台風で、校舎の倒壊に巻き込まれながら児童5人を救って殉職した豊津尋常高等小学校(大阪府吹田市)の教師、吉岡藤子さんの実話をもとにした物語(あゝ吉岡訓導)を演目にしたもので、菊地さんの巧みな節と啖呵により、命の大切さや災害の恐ろしさが心に迫る。この室戸台風では全国で死者・行方不明者約3,000人もの被害が出ており、大阪府では強風による木造校舎の倒壊で児童・教師の犠牲者を多数出している。



室戸台風で倒壊した大阪天王寺小学校

テレビに映らないという意味では、浪曲と土木屋は似ていますね。

無口な縁の下の力持ち。 土木の世界も浪花節

木下 ●昔はテレビで浪曲を見たことがありますが、今ではほとんどやってませんね。やはりテレビに出ないと広げるのは難しいでしょう？

春野 ●今の世の中はテレビに映ることがすべて真実みたいなどころがあります。浪曲はほとんどテレビに出ないので、世間からすると存在すらしていないに等しい。こういうことがすごく嫌だと思えます。

木下 ●テレビに映らないという意味では、浪曲と土木屋は似ていますね。土木関係のクライアントは主に役所なので、一般に向けてコマースをする必要がなく、テレビにあまり出ません。たまに名前が出るときは談合とか悪いニュースのときだから、イメージが低下する一方。日本の報道は、ゼネコンが悪い、公共事業が悪い、といえば全部その方向になっていきますからね。

春野 ●私自身、テレビというメディアに左右されていた時期がありました。でも、浪曲に出合えたことでテレビに映っていない、もっと面白い世界があることを知っ

て、テレビから解放されたいと思うようになりました。浪曲を始めてからずっとテレビを置いていません。一切見ないなんて、極端すぎるんですけどね。

木下 ●公共事業や土木などに対して悪いイメージを持っていませんか？

春野 ●そうですね、多少はあるかも……

木下 ●土木というのはすばらしい言葉です。土と木で物をつくるわけですから非常にいい言葉です。でも悪いイメージのレッテルを貼られたので、学校や役所でも使わなくなりました。私は東京大学の土木工学科出身ですが、今は社会基盤学科に変わっています。都道府県でも土木部という名前はほとんど変わって、都市整備部とかになっています。

春野 ●土木は暮らしに絶対必要で、大切な仕事なのに……。阪神大震災が起こったとき、居ても立ってもいられず、東京から神戸へボランティアに行きました。あのときは水も電気もガスも止まって本当に困りました。水が出たり電気がついたりすることのありがたみを実感しました。快適に暮らせるように整備してくれる人たちがいることを忘れてはいけないと思います。**木下** ●生活に身近なことをやっている土木屋は、縁の下の力持ちです。例えば、道路は走れて当たり前。開通したときは喜んで、開通式には地元の中学校のブラスバンド部が演奏したりしてくれるのですが、一年も経たないうちに空気のような存在になっている。誰か汗をかいてつくったなんて忘れてますよね。

春野 ●浪曲になりそう！ 世のため人のために、汗水たらしてみんなで力を合わせてつくって、完成したらひっそり去ってゆく……浪花節の世界ですよ。

木下 ●土木事業はチームワークでやるから個人が評価されにくい。誰が発注・設計・施工したかなど名前も残りません。建築だと建築家の名前が出て、世界的な賞で表彰されるという名誉もありますが。

春野 ●優秀な人材を集めるためにも変えていく必要があるかも。もう少し一般の人

にありがたみをもってもらえるようにPRの工夫がいろいろですね。

木下 ●PRの努力は必要ですね。少なくとも正しい事実を世の中に伝えないと。公共事業バッシングにしても、東京のマスコミは「道路は要らない」と報じますが、地方に行くと「早く道路をつくって!」と懇願されます。紀伊半島南部とか福井県、兵庫県豊岡、京都の福知山などは道路整備が遅れているので切実で、地元の女性たちも真剣な眼差しで「早く道路を!」と渴望している。大阪府知事や経済界も第二京阪道路や新名神高速道路などの早期整備を強く要望しています。地域から「道路をつくるな」という声はどこからも聞こえないのに、なぜ「道路は要らない」と報道するのか不思議でしょうがない。それが本当の世論であれば、それでいいんですが、現実とはありません。事実と異なることが報道されるのは残念です。

土木事業とは、 景観を創造することでもある

春野 ●浪曲の舞台を訪ねると、景色が全然違うことが多く、名所古跡が保存されていないんだなあ、とさびしくなります。町は、人がそこで生きてきた歴史ですから、歴史的な町並み、美しい町並みをぜひ保存していただくようにお願いします。以前、「出世太閤記」の舞台である岡崎市の矢作川を訪ねたとき、幼いころの秀吉、日吉丸と蜂須賀小六の「出会い之像」が橋のたもとにあつてすごく感激しました。でもこんなことはまれなんです。

木下 ●国土交通省では町づくりも進めています。歴史的な町並みを保存するために地方自治体の支援などを行っており、京都でも町家保存の取り組みを展開しています。町並みの維持は行政の支援や規制がないと難しいでしょうね。一軒だけで維持しても魅力がありません。面的にまとまった地域で歴史的風景を維持することが大切です。

春野 ●京都ではファーストフードやコンビニなどの外観がシックな色になっていたりしますね。

木下 ●そういう規制も必要ですし、持ち主を支援することも大事。ヨーロッパには美しい町が多いでしょ？ 日本のニュータウンは年数が経つとだんだん汚くなりますが、ヨーロッパの都市は悪くなりません。それはなぜか？ まずヨーロッパの方が規制が強い、そして町並みへの意識が違うという理由が上げられます。ヨーロッパでは人前に洗濯物を干しません。見えないように中庭に干しています。看板もベタベタ立ってない。住環境への意識が違います。そして規制も厳しい。ロンドン郊外の住宅街を訪れたとき、あまりにも戸建てがきれいにそろっているのが驚きました。市役所が一軒一軒、設計図から外観の色まで全部チェックして、審査に通らないと建てられないそうです。そのぐらい厳しく規制するから町並みが整うんですね。

浪曲に出合えたことで、
テレビよりもっと面白い
世界があることを知りました。



春野●町の人は、町並みを維持していきたいという意識があるから規制を受け入れているんですね。

木下●そういうことは日本ではあまりありません。

春野●日本人は町並みへの美意識が劣っているのでしょうか？

木下●日本人の意識も少しずつ変化していると思います。電線を地中化^{※5}する動きもあります。電線や電柱が見えなくなれば、景観が見違えるほどよくなります。欧米の都市では電線をほとんど見ませんし、ジャカルタなど東南アジアの首都圏でも見ません。例えば、一度地上に電線を引くと、電話線がその上に乗って、次にケーブルテレビの線が加わって、みるみる汚くなります。

春野●早く実現しそうですか？

木下●いえ、コストがかかるので、すぐに実現というわけにはいきません。国土交通省も費用を負担しますが、地方自治体や電力会社、電話会社、ケーブルテレビ会社など関連事業者の協力も必要です。関わる相手が多いのでなかなか前進しませんが、景観への意識の高い地域から着手するなど重点的に行っています。

春野●いろいろなことを進めていらっしゃるんですね。

木下●景観といえば、土木遺産にもおもしろいものがありますよ。関西では京都の琵琶湖疏水^{※6}。この水路のおかげで琵琶湖から京都に水をひくことができ、飲み水や工業用水がまかなえて、明治以降の京都の発展に大きく貢献しました。功績をたたえて土木技師・田辺朔郎氏

の銅像も立っています。琵琶湖疏水は今見ても美しい。いろんな場所に道路やダムをつくりましたが、残念ながら絵になるものは少ないんです。橋もそうです。大阪には八百八橋といわれるほどたくさんの橋がありますが、昔架けた橋は魅力的です。

春野●特に、中之島界隈の橋^{※7}は趣がありますね。夜にライトアップされるとさらにいい雰囲気です。

木下●最近の橋は効率重視になりすぎている感じがします。私たちは景観を創造している、後世に遺す仕事をしている、という意識に変わらないといけません。時代もそれを求めていると思います。今建設中の“緑立つ道”^{※8}と呼ばれる第二京阪道路は、まさに絵になる道。風景と環境に配慮した道づくりを行っています。



インフラ整備は後世に遺す仕事です。

私が浪曲に専念できるのも、安心して暮らせる町があるからです。

先人の気概をもって、後世のためにもインフラ整備を

木下●ところで、春野さんのこれからの目標は？

春野●私が師匠に強くひかれるのは、聞く人を物語の中へ引き込む凄まじい力です。その引力はジャンルを超越したもので、そのような芸ができるように修業し続けたいと思います。そして、「乙女組」で浪曲は難しいとか古臭いというイメージを変えていきたい。土木のイメージを変えるということと似ていると思うんですけど、世間の先入観を壊すようにPRに励みます。

木下●浪曲は乙女組をきっかけに必ずブレイクしますよ。我々もブレイクしなければいけない。悪いレッテルを貼られて、打ちひしがれているわけにはいきません。道路は十分整備されたと言われるんですが、地方からは「この道路を整備しなければ、都会と競争するチャンスすらない!」という悲痛な声が上がっています。地域の人たちと語り合うと、ものすごく期待されている

仕事がたくさんあるので、ゼネコンの方々にも自信と誇りをもって取り組んでもらいたい。

春野●防災に関してはいかがですか？

木下●防災面では先ほどお話しした水害対策とともに地震対策も緊要です。地震の起こる確率は年々高まっており、今年なければ来年さらに確率が高まります。今の備えでは不十分で、やるべきことはたくさんあります。インフラ整備は後世に遺す仕事です。我々が当然のように利用している道路やトンネル、空港などは昔の人が整備してくれたから、そこに存在するんです。今よりもGDP に対するインフラ投

資比率は大きく、相当無理をしてお金を使っています。それを現代の我々が享受して豊かな思いをしている。自分たちは豊かになって、子孫に引き継ぐための投資をやめてもいいのでしょうか？ 将来に何を遺すかという発想で考えたとき、私たちがやるべきことはまだまだ多くあります。

春野●私が浪曲に専念できるのも、お客様に浪曲を楽しんでいただけるのも、安心して暮らせる町があるからです。これからも快適で安全な町づくりをよろしく願います。

※当対談は2009年7月8日に行われました。
※現在木下氏は財団法人 ダム水源環境整備センターに勤務されています。

先人の社会資本整備のおかげで、
私たちは豊かな暮らしを手に入れています。
また、先人が芸能文化を守り続けたおかげで、
すばらしい舞台を楽しむことができます。
遺してくれた資産をさらに発展させて未来へ継承するために、
私たちが努力し続けなければならないということを、
お二人の対談で深く考えさせられました。

※5 電線の地中化

電線の地中化などにより、電柱をなくす無電柱化計画を国土交通省が推進。景観の改善だけでなく、歩行者の快適な通行、災害時の電柱・電線による事故防止、情報通信ネットワークの信頼性向上などにも効果がある。

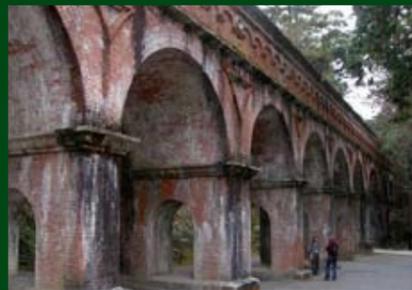
※7 中之島界隈の橋

大川(旧淀川)から分かれた堂島川と土佐堀川に囲まれた中之島エリアは“水都大阪”のシンボル。大江橋、淀屋橋、水晶橋、難波橋など景観のいい橋が町の魅力を引き立てている。(写真上:水晶橋、下:難波橋)



※6 琵琶湖疏水

明治の京都近代化政策の最大事業で当時の京都府知事が計画。土木技師・田辺朔郎が1885年(明治18年)に着工し1894年(明治27年)完成させ、水力発電増強や水道新設など京都発展の原動力となった。現在も水道用水などで利用されている。(写真右:水路閣)



※8 緑立つ道

京都と大阪を結ぶ第二京阪道路の愛称。環境や景観に配慮しており、豊かな「みどり」、風景になる「みち」などデザインにこだわった道づくりを行っている。

